

国士館を支えた人々

齋村 五郎



齋村 五郎

一九二九（昭和四）年に創設された国士館専門学校の武道教育は、昭和一〇年代には隆盛を極め、「東の国士館、西の武専（大日本武徳会武道専門学校）」と称されるまでになった。その要因の一つに高名な教授陣を備え

浪江 健雄



ていたことにある。中でも齋村五郎は、「国士館の齋村か、齋村の国士館か」と言われるほどに、両者の関係が評されていた。一九五七（昭和三二）年五月には剣道十段を授与され、「剣聖十段」と称された人物である。ちなみに剣道十段は史上五人しかない。

一九六四（昭和三九）年一〇月一五日、日本武道館では、東京オリンピックのデモンストラーションとして剣道形が披露された。うちかたは、警視庁名誉師範の持田盛二と齋村五郎がつとめた。剣の奥義を知り尽くした二人の神業形であったという。

齋村五郎は一八八七（明治二〇）年五月四日、旧黒田藩士齋村霞栖の四男として、福岡市養巴町（現福岡市中央区大名）に生まれた。父の霞栖は黒田藩の剣客で、大日本武徳会福岡支部の演武大会では腕前を披露するなどしていたという。

一八九四（明治二七）年四月、齋村は福岡市立大名尋常小学校に入学。一八九八（明治三一）年四月には福岡市立福岡高等学校に入学した。

高等学校を卒業した齋村は、一九〇二（明治三五）年四月、旧藩校で名門中学の修猷館に入学した。この頃より養父町にあった剣道道場に通い始めた。父が剣道家であったこともあり、自然な成り行きであった。また、中学の剣道部では、生涯の友となる一年先輩の中野正剛、同級の緒方竹虎と出会うことになる。

修猷館中学時代の齋村は、かなりの暴れん坊であった。ただし、喧嘩はしても正義感強い。とくに威張る先輩などがいると許しておけず、食ってかかっていく。名実ともに秀才中学の番長的な存在であった（早瀬利之『気の剣 剣聖十段齋村五郎』スキージャーナル、一九九七年）。

かくして喧嘩騒動は度重なり、学校にも知れるところとなった。そうしたことからか、中学三年になったばかりの五月、齋村は修猷館を退学し、私立福岡仏教中学に編入している。また、通い路などの関係もあり、道場も久保山高峰の一刀館に替わった。

そして、この頃母を亡くすという大きな不幸にまわられた。齋村は母の死を乗り越えるかのように剣道に打ち

込んだという。

当時の日本国内は、対ロシア政策で緊張していたこともあり、国を挙げて兵力拡充の機運が流れていた。それは武道強化のきっかけとなり、一九〇二年に、大日本武徳会が「武術家優遇例」を定め、以来、毎年教士・範士の称号選考が行われた。同時に武道教員養成も急がれた。学校では随意科として武道が採用されるが、指導する教員が不足していた。京都の大日本武徳会に武術教員養成所の設立案が検討されたのは、いずれ近い将来、武道が中等学校の正科になると見通してのことであった。

一九〇五（明治三八）年一〇月、京都に日本初の武術教員養成所が設置されることとなり、各県の武徳会支部に推薦者の募集がかかった。大日本武徳会福岡支部でも誰を推薦するかで会議をもった。柔道、剣道それぞれ一名ずつで、年齢は一九歳以上と規程されている。剣道では、久保山高峰が齋村を強く推した。しかし、一つだけ条件に満たないものがあつた。それは齋村の年令が一年足りないことだった。しかし久保山は、年齢に関係なく、齋村が一番ふさわしいことを説き、その意見が通った。齋村は、その推薦を受け、京都に旅立った。

武術教員養成所が置かれたのは、京都北三条仁王門通りの寂光寺であった。そこは、学生寮も兼ねていた。

しかし、斎村はすぐに武術教員養成所には入らず、最初の三か月あまり、南禅寺の僧堂で禅の修業をしている。それを導いたのが、生涯の師と仰ぐことになる内藤高治であった。内藤は当時武術教員養成所の教授を務め、すでに日本を代表する剣道家としてその名を知られていた。

斎村は内藤との出会いについて次のように述べている。

私が初めて先生の温容に接したのは、明治三十八年六月に剣師久保山高峯先生の推薦状を持って先生のお宅をお訪ねしたときで、私が弱冠十八才のときでした。

この年の秋に創設されるはずの武術教員養成所へ入所準備のためでした。その時、私は経済上の事情で普通の下宿生活は出来ませんから、金のかからぬ所を世話して下さいとお願いしました。今から考えると随分虫のよいお願いでしたが、先生はいやな顔もせず、早速、南禅寺の僧堂にお世話して下さいました（「内藤先生を偲ぶ」高岡謙次編『剣聖 内藤高治先生』碧水会、一九八〇年）。

三か月にわたる修業を終えた斎村は、一九〇五年一月、武術教員養成所に入った。そこでの学生生活の様子は、斎村の遺稿に記されている。

授業は術科と学科である。術科は午前と午後と二回、学科は国漢、法律、武道史その他であった。ところでその術科が大変だ。何故ならば養成所開校当時は生徒の数よりも先生の方が多かった。尤も本部の教授助教授としては内藤先生を首席として五、六名であったが、外来の先生が見えるので生徒十人に対して先生十二三名と云う奇観を呈した。生徒は地方ではお山の大将である。既に先生株の者もあった。しかし松造りの武徳殿に来ては一個の田舎剣士である。況んや息つく隙もない荒稽古には流石の自称豪傑連中も忽ち「へど」を吐くやら目を廻すやらで閉口した。当時は苦しさのあまり先生方をのろつたりしたが今から考えて見ると、この時代の稽古の有難さが沁々と味わわれる。特に内藤先生の高潔なる人格と豪壮なる剣風とは年を経るに従いその光が強くはつきりと判るようになった（「右武会の生れた頃」『刀と剣道』第一巻第二号、雄山閣、一九三九年六月）。

こうした武術教員養成所での稽古や内藤による精神的薫陶がその後の齋村を形成したと言っても過言ではない。

一九〇八（明治四一）年五月、武術教員養成所の卒業を目前にした齋村に宮崎赴任の話が持ち上がった。本心ではそのまま京都に残り、助教として指導にあたりたかったが、宮崎中学に剣道教師がいなくなるので行ってしまうとのことであった。齋村の心境は複雑だったであろうが、宮崎行きを承諾する。

かくして一九〇八年六月、齋村は宮崎県立宮崎中学校剣道教師嘱託として赴任した。当時宮崎中学三年生であった平島敏雄（後に滝鉄副総裁、参議院議員などを務める）は、赴任当時の齋村をこう記している。

齋村先生が、宮崎中学校に剣道師範として赴任して来られたのは、明治四一年六月で私は三年生であった。先生はその時二十歳を僅かに越しておられたが、立派な体格と落ち着いた風ぼうで相当老けて見えた。当時宮中みやちゆうには上級生に二十歳を越す古強者が数人いて、若い先生を軽視し、いやがらせをする悪習があったが、齋村先生の道場における堂々たる風姿と、京都の武徳殿で鍛え上げられた腕前を見て、

彼等は忽ち転じて礼讃者となったのである（「宮崎時代の齋村先生」齋村龍雄編『齋村五郎の遺稿と想い出』講談社、一九七二年）。

また、齋村は生徒たちに、志を同じくする者が集まり、研修することを目的とした会を作らせた。「輝誠会」と称した。前掲「宮崎時代の齋村先生」によれば、

齋村先生を中心にして、五年四年三年の各クラスから代表的な者を二人ずつ、選抜して計十八名をして会員とし、毎月一回会合して偉人の研究をすることにした。希望者は多かったが、一クラス二名としたのは場所やその他の事情を考えての事であった。初回は明治四十三年の五月だったと思う。最初に

取り上げたのは西郷南洲翁であった。齋村先生から翁に関する所感を聞き、あらかじめ三人に翁についての感想を用意させて発表せしめ、最後に討論会に入った。「南洲翁が僧月性と薩摩湾に入水した事は非」については賛否両方共、熱弁を振るった。輝誠会の名が齋村先生によって決められたのも、南洲翁の「至誠一貫」に由来するものと思う。

このように齋村は単に剣道を教諭するだけではなかった。そこには修猷館中学からの友人である緒方竹虎や中野正剛が早稲田大学に進みジャーナリストを目指して勉強していたこともあり、齋村自身も法律家の道を進みたいという気持ちもあつたことに所以していた。それは剣の修行のみでなく、生涯を通して文筆活動も盛んに行っていたことがそれを物語っている。その題材は、剣道の歴史、技、精神論等多岐にわたり、とくに月刊誌『刀と剣道』（雄山閣）には、一九三九（昭和一四）年五月の創刊から関わり、毎号のように寄稿している。また、中学校教諭などを務め、学校教育としての剣道普及に尽力した金子近次と共に、戦前の剣道教科書を代表する『新制剣道教科書』（精文館、一九三二年）を著している。

一九一（明治四四）年九月、齋村は宮崎中学を依願退職する。この時は、剣道家ではなく法律家を目指し上京する決意にあつたという。

しかし、東京へ向かう途中、齋村は武術教員養成所時代の恩師に挨拶をすべく、京都に立ち寄つた。そこで運命が変わつた。恩師の内藤から「弁護士になるのもいいが、齋村、もう一ぺん決心をし直さんか。長年鍛えた腕を、むぎむぎ捨てるのはいかにも惜しい。本部で再修行したらどうだ」（小澤丘『近世剣豪伝』体育とスポーツ出版社、

一九八九年）との言葉を受け、その説諭にしたがつた。かくして京都に戻つた齋村は、武徳会商議員兼常議員楠正位の玄関番となり、剣道修行と勉学につとめた。実のところ齋村は、武術教員養成所を「仮卒業」のかたちで宮崎に赴任したため、まずは学生としての身分であつた。齋村は、楠からも多くを学んだ。その教えをこう述懐している。

先生は常に我々に説かれた。

「武道家として世に立つには物質欲と名誉欲とを離れ、自己の与えられた天爵を尊び、自己の学ぶ道を楽しむ心境になりきらなければならない。凡そ武道家と黄金、武道家と人爵とは縁の遠いものだ。若し人爵や黄金に恋々たるものがあれば、よろしく去つて他に職を求むるがよい。

武道家は武士道の実行者でなければならぬ。それは、君の馬前に討死する覚悟があればよい。命は鴻毛より軽く義は泰山より重しと悟ればよい。身を殺して仁を成すことが出来ればよい。

剣道は武士道を実行する為めに修行するのだ。武士道を離れた技術だけなら虎狼の猛きである。世に百害あつて一利がない。

利巧な剣術家が多い。大馬鹿の武道家は稀有だ、名誉も黄金も命も入らぬ大馬鹿が出て欲しい。」等々であった（前掲「右武会の生まれた頃」）。

その後一年して卒業が許され、武徳会本部武道専門学校剣道助教を拝命した。ようやく剣一筋の生業を得た斎村は、同僚の大島治喜太（後に国士館専門学校教授、大日本武徳会範士となる）と共に近畿地方を始め各地に武者修行に赴くなど勢力的に務めに励んだ。

ところが、一九一六（大正五）年、斎村は武徳会本部武道専門学校剣道助教を依願退職し、上京することになる。その理由について斎村自身は詳細に語っていない。しかし、当時講習生であった小城満陸（後に剣道範士九段となる）の談によれば、

大正五年春、武術専門学校で教授法改善運動が起ってその急先鋒であったということだが、学校そのものの改革もあつたのではないかと思う。そのために遂に職を擲なげつたことになつたのである（斎村先生に師事して「前掲『斎村五郎の遺稿と想い出』）。

斎村自身も上京時の決心については、「上京当時

の思い出」と題する稿に記している（前掲『斎村五郎の遺稿と想い出』）。

大正五年四月十九日の夜行で我々一家は京都を出発した。前に余が武徳会を追放されたとき、武徳会ではさすがに気の毒に思つたか、地方の有力支部の師範として推挙してやろうといつた。しかし余はそれを断つて敢然として病妻（膀胱カタルで不治の宣告を受けていた）と幼児三人を連れて悲壯の決心で上京した。余は二十九歳、妻は二十七歳、長男竜雄は六歳、長女友子は四歳、そして次女の古都子は一歳であつた。

このように覚悟の上とはいへ、東京では食うや食わずの生活がしばらく続いた。牛込区山吹町剣道道場明神館支部、本所高等小学校、早稲田実業学校などで師範を務めたが、まとまった収入にはならなかつた。しかし、それとは別に修道学院、有信館、戸山学校、六本木警察所などには修行のために通い猛稽古を続けた。

ようやく転機が訪れたのは、上京後丸二年を経た一九一八（大正七）年であつた。警視庁主席師範中山博道が救いの手を差し伸べた。斎村は感謝の言葉をこう記



している。

中山先生は余が貧困に耐え、ひたすら修行に精進している態度を見聞して大いに同情されて、大正七年七月に門弟で警視庁の師範であった橋本氏が成蹊学院の専任師範となり警視庁を辞職された、その後任として四囲の反対を押し切つて余を師範に入れてくれた。余が三十一歳の時であった。武徳会出身として同庁の師範を拝命したのは、余が始めてである。上京後丸二年でやっと専門家としての地位と経済的の安定を得た。これはひとえに中山先生のお陰と、その恩を深く感謝している（前掲「上京当時の思い出」）。

齋村は、警視庁からの手当でも十分に生活できるようになったが、各所からの講習依頼も引き受け、さらに精力的に活動を続けた。その内の一つが後に教授を務めることになる国士館であった。

齋村は、頭山満の紹介で国士館の創立者柴田徳次郎と出会い、国士館と関わりを持つことになったという（前掲『気の剣 剣聖十段齋村五郎』）。一九二二（大正一〇）年には、世田谷の国士館館舎に居を移すまでになつ

た。柴田とは同郷であり、彼が武道の教育的重要性を早くから提唱していたことにも賛意を寄せていたものと推察される。同年六月には、国士館高等部一期生を引率し、朝鮮・満洲・天津・北京・濟南・青島・上海・漢口・四川省へ三か月にわたり視察旅行をしている。その時同行した学生の武田熙（後に学校法人国士館理事を務める）は、その時の事を「齋村先生のこと」（前掲『齋村五郎の遺稿と想い出』）で述べている。

僕は国士館第一期生だったが、一期生の卒業する前の年に、僕等卒業見込者のうち希望するものによつて、満鮮支見学大旅行団が組織された。三ヶ月間という長途の旅だった。引率者は陽明学で有名な森茂教授と劍の齋村先生だった。僕が現在支那武術「通背拳法」の免許皆伝であり、同名の著書を公刊（中国文）したりしているのはその遠因が、実はこのとき齋村先生に従つて、支那武術をしたことにあるのだ。

一九二六（大正一五）年八月には国士館にほど近い地に自宅を新築する。齋村は、その理由を次のように語っている。

この私の住居は国士館の師範として勤務するため大正十五年に建てたものです。私は早朝歩いて国士館に行き、そこで稽古をした後、その日の予定に従って次々に道場を廻り、何年いや何十年もの習慣になりましたが、いわば国士館は私のホームグラウンドと言っても良いでしょう。また警視庁には三十八年間勤め、終身名誉師範として厚遇されるという破格の恩典を受けているわけです（「剣の道六十年」前掲『斎村五郎の遺稿と想い出』）。

一九二九年四月、国士館専門学校が創設され、斎村は教授に就任した。その後、学校での武道教育が禁止となる一九四五（昭和二〇）年一月まで一六年六か月、満四二歳より五八歳に至る最も充実した時期を国士館で過ごした。その間次の時代を担う数多の剣師を育てた。その一人であり、後に国士館専門学校教授、警視庁剣道名誉師範剣道範士九段となる小川忠太郎が、国士館専門学校時代に受けた斎村の教えについて書き残している（「故斎村先生を憶う」前掲『斎村五郎の遺稿と想い出』）。

まず、武道教育の目的は「試合の為ではない。武道の技術を通して、国士を作る事にある。換言すれば人間形

成及び人間社会形成の為の武道」であったという。

また、稽古にあつては「竹刀を真剣の考で使い、身を捨てて錬磨する事が大切である」としたいわゆる武徳会流の捨身稽古であり、実際の様子については次のように記している。

稽古は日に二回、朝稽古は五時半より六時半迄、寒稽古三週間は、朝四時半より五時半迄、全学生切り返しだけである。国士館専門学校に朝稽古を課する事には反対者も有ったが、斎村先生が之を押し切つて断行されたのである。先生は朝稽古三十分前に道場に入っておられた。この事一つだけでも学生に対し無言の裡に、大きな感化を与えたのである。

専門学校学生に対し訓話の一片

一、剣道で一番大事な事は一生修行という事である。

一、常に今日から今日こそという心で努力せよ。

一、朝稽古の折り遅刻せる学生に対し

剣道は敵に勝つのに非ず、己れに勝つ事が大切である。遅刻は己れに負けているのである。人生に於て勝敗の分かれ目は僅か一分である。ほんの一寸である。この一分一寸を捉えるのは現在の心である。





大正 11 年 大講堂前にて（『斎村五郎の遺稿と思い出』より）

ここが大切のところである。青年時代に人より一歩でも半歩でも先に出ている事は、将来勝の原因となる。朝は定刻より十分前に道場に来るように、それには眠い苦を打ち破らねばならない。それが修行である。また人間は焦ってはならないが、焦るのは時間に残れるからである。自分は常にこの時間という事を心掛けている。而してこの理を剣道のみならず、各方面に活用する事が大切である。之は誰でも言うが、行なう事は困難である。等々

斎村は終戦翌年の一九四六（昭和二二）年二月、警視庁警務部教育課勤務となったが、七月に剣道が禁止されると、警視庁体育師範となり、警棒の指導と普及に務めた。日本古来の剣道は禁止であったが、竹刀を短くし、袋竹刀にしての剣道が占領軍に認可される。認可が下りると早速袋竹刀による警棒剣道を開始した。斎村は、小太刀の心得で指導、普及に取り組んだ。さらに斎村は、機動隊に正科として採用されていた杖道の応用に着眼した。杖道の警杖は少し長めではあるが、切り返しができ、最悪の場合は、警杖の中に剣道が温存できると決心し、研究に取り組んだ。加えて、警察官が携帯する警棒と、機動隊が使用する警杖の採用を強く進言した。そし

てその齋村の意見が採用され、今日の逮捕術の重要な部分を占めるようになったのである（前掲『氣の剣 劍聖十段齋村五郎』）。

こうしたなか、一九五〇（昭和二五）年、まずは柔道が学校体育として復活し、その後、弓道、剣道の順で続いていくことになる。

一九五六（昭和三一）年四月、国士館短期大学に体育科が増設されると、齋村は早速に講師として招聘された。国士館にとって武道教育の復活は悲願であり、齋村の復活もまた然りであった。

翌一九五七年三月、齋村は警視庁剣道師範を依願退職する。警察功労賞を授与された。翌月には警視庁剣道名誉師範を委嘱され、同年五月にはついに剣道十段となる。齢七〇歳の時であった。

その後、さすがの齋村も病がちになったが、先に紹介したように、一九六四年一〇月には東京オリンピックのデモンストレーションで剣道形をうった。また、全国の剣道大会には招待されるままに出かけた。

一九六八（昭和四三）年一〇月、冬の間は暖房のある病院へ入院するようにとの主治医の勧告にしたがい。東京目黒の東京共済病院に入院した。春が来るまでの病院生活の予定であった。しかし、翌年三月一三日、心筋梗

塞にみまわれ逝去。八二歳であった。

先述したように、齋村は友人の緒方竹虎や中野正剛らの影響もあり、一時法律家への転身を考えた時期があった。齋村の伝記『氣の剣 劍聖十段齋村五郎』を著したジャーナリスト早瀬利之氏は、このことについて「文才や実行力のある五郎が同じ道を選んでいたら、日本のその後もちがっていた」のではないかとしている。早瀬氏の指摘のごとく、もし政治家の道を歩んだとしても大成したことだろう。いずれにせよ、清貧にその道を究めたにちがいない。まさに人物であったといえよう。